

N O M A  
野間B遺跡3

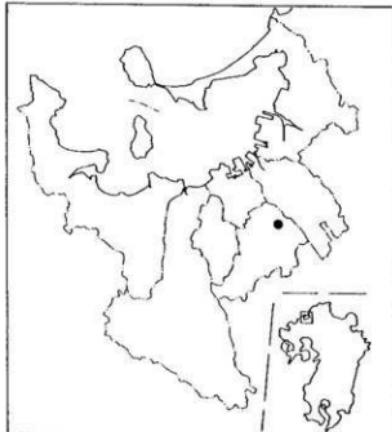
—野間B遺跡第4次調査報告—

2015

福岡市教育委員会

N O M A  
野間 B 遺跡 3

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1264集



調査番号 0767  
調査略号 N O B - 4

2015

福岡市教育委員会

# 序

現在、九州の中核都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は増加の一途をたどっており、これらにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、南区向野2丁目において発掘調査を実施した野間B遺跡第4次調査の記録を収録したものです。

調査の結果、大宰府と鴻臚館を結ぶ西門ルートの官道の一部が市内で初めて確認され、ルートの復元において重要な成果となりました。

調査に際し、快いご理解とご協力をいただきました地権者様には心よりお礼申し上げます。また、ご協力をいただきました関係者各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝致します。この報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献する事ができましたなら幸いに存じます。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井 龍彦

## 例　言

1. 本書は、南区向野2丁目172番地内において個人兼用共同住宅建設にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課（当時）が平成19年度に実施した野間B遺跡第4次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位は旧国土座標第II系による座標北で、磁北はこれに6°0'西偏する。
3. 調査区は予定建物を基軸として任意の方眼を設定した。
4. 遺構の呼称は略号化し、溝→SD・その他の遺構→SXとした。
5. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦による。
6. 本書に使用した遺物実測図は加藤・井上加代子による。
7. 製図のうち遺物は中尾祐太、他は加藤による。
8. 本書に用いた写真は加藤による。
9. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
10. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

I.	はじめに	1
	1. 調査に至る経緯	1
	2. 調査の組織	1
II.	調査区の立地と環境	7
III.	調査の記録	7
	1. 調査の概要	7
	2. 上面の調査	9
	3. 下面の調査	13
	4. その他の混入資料	16
	5. 近世資料	17
IV.	小結	17

挿図目次

- |                                       |                                       |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| Fig.1 水城西門ルートと関連遺跡(1/30,000).....2    | Fig.2 調査区位置図(1/4,000).....3           |
| Fig.3 調査区位置と吉留推定官道(1/4,000) ..... 4   | Fig.4 調査区周辺測量図(1/500).....5           |
| Fig.5 上面遺構全体図(1/160).....6            | Fig.6 SX01土層断面図(1/50).....8           |
| Fig.7 SX02土層断面図(1/50).....9           | Fig.8 B・C層出土遺物実測図(1/3).....10         |
| Fig.9 SD02全体図(1/160).....11           | Fig.10 SD02第4トレンチ南壁土層断面図(1/50).....12 |
| Fig.11 SD02第2グリッド南壁土層断面図(1/50).....12 | Fig.12 SD01全体図(1/160).....13          |
| Fig.13 SD01第2グリッド北壁土層断面図(1/50).....14 | Fig.14 SD01第1グリッド北壁土層断面図(1/50).....14 |
| Fig.15 SD01第2グリッド南壁土層断面図(1/50).....15 | Fig.16 SD01第3トレンチ南壁土層断面図(1/50).....15 |
| Fig.17 混入その他の出土遺物実測図(1/3).....16      | Fig.18 近世出土遺物実測図(1/3).....16          |
| Fig.19 西門ルート推定位置(1/2,000) ..... 18    |                                       |

四版目次

- |                           |                          |
|---------------------------|--------------------------|
| PL1-1 上面遺構全景（北西から）        | -2 上面遺構全景（北東から）          |
| PL2-1 SX02検出状況（北西から）      | -2 SX02完掘状況（北西から）        |
| PL3-1 SX01土堤（東から）         | -2 SX01土堤（北西から）          |
| PL4-1 第1・第2グリッド（北西から）     | -2 第1・第2グリッド（北東から）       |
| PL5-1 第4トレンチSD02土層断面（北から） | -2 第2グリッドFSD02土層断面（南東から） |
| -3 第3トレンチSD01土層断面（北から）    | -4 第1グリッドFSD01土層断面（北から）  |
| PL6 出土遺物                  |                          |

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市南区向野2丁目172番地内において、個人事業者による個人兼用共同住宅建設設計画策定に当たって埋蔵文化財の有無の照会のため、平成20年1月11日に事前審査願いが埋蔵文化財第1課に提出された事により始まる。申請面積は393.58m<sup>2</sup>、受付番号は19-2-768である。

埋蔵文化財第1課で確認した所、申請地が野間B遺跡に隣接し、当時事前審査係長であった故吉留秀敏が、周辺踏査の結果推定した西門ルートの官道上に位置するため、内容など状況を把握するため20年2月19日確認調査を実施、その結果大きな溝状の落ち込みを検出し、古代の瓦片が出土した。

同課では遺跡が当該地まで広がるものと判断し、設計変更等での現況での保存が可能か申請者と協議を重ねたが、結果として保存は困難と判断した。よって事前の発掘調査を実施する事となり、調査に関して個人と教育委員会との間で協議書をかわし平成19年度の国庫補助を得て調査を実施した。

発掘調査は平成20年3月4日に着手、同年3月27日に全ての工程を終了した。

遺跡名	野間B遺跡	調査次数	4次	調査略号	NOB-4
調査番号	0767	分布地図番号	38(塩原)	遺跡登録番号	0130
申請面積	393.58m <sup>2</sup>	調査対象面積	314.5m <sup>2</sup>	調査実施面積	210.35m <sup>2</sup>
調査期間	平成20(2008)年3月4日～3月27日			事前審査番号	19-2-768
調査地	福岡市南区向野2丁目172番				

## 2. 調査の組織

【調査主体】福岡市教育委員会

(発掘調査 平成19年度)

【調査総括】教育委員会文化財部長 矢野三津夫 埋蔵文化財第1課長 山口謙治

調査係長 米倉秀紀

【調査庶務】文化財管理課 鈴木由喜

【調査担当】埋蔵文化財第1課調査係 加藤良彦

【発掘作業】永田豊彦 原田浩 藤村正勝 山中征生 浦伸英 中村尚美 今村由利  
北野宏行 近藤英彦 崎山幸義 濱口長治 米良恵美 元澤慶寛  
結城敦雄 中野暢子

(整理報告 平成26年度)

【整理・報告総括】経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課 課長 常松幹雄

同課調査第1係長 吉武学

【整理・報告庶務】埋蔵文化財審査課管理係 横田忍

【整理・報告担当】埋蔵文化財調査課主任文化財主事 加藤良彦

【整理作業】国武真理子



Fig.1 水堀西門ルートと関連遺跡 (1/30,000)

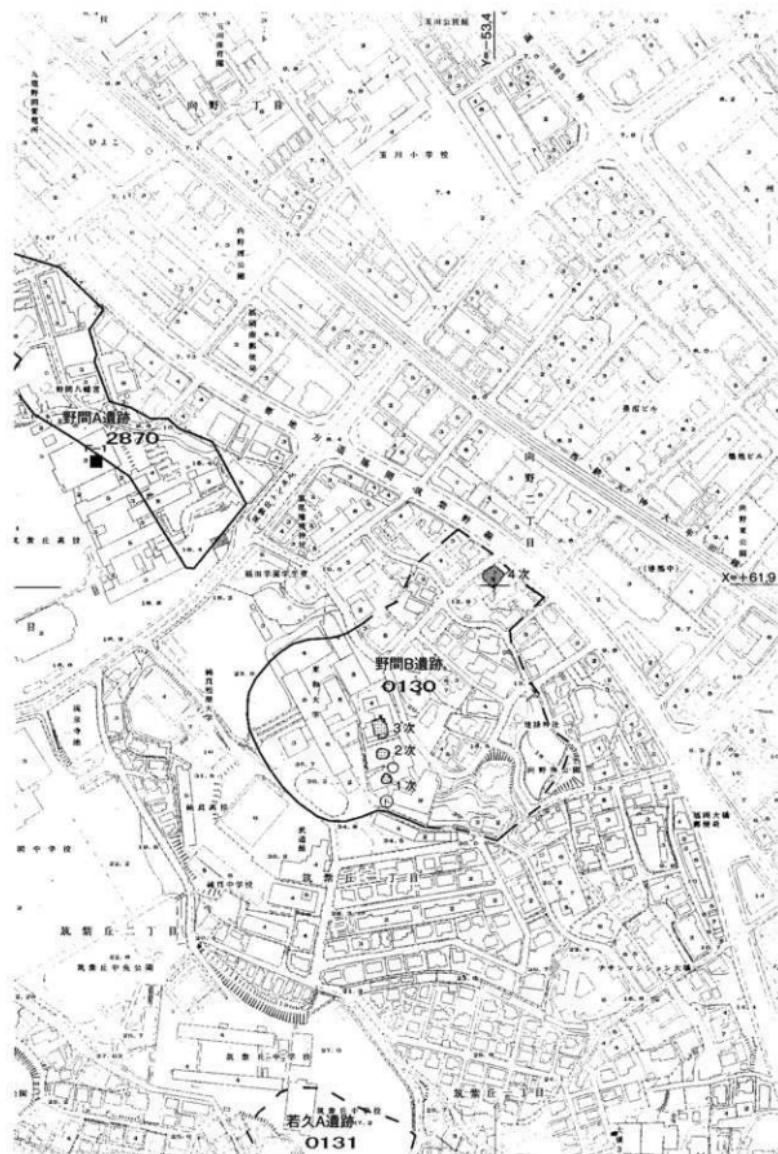


Fig.2 調査区位置図 (1/4,000)

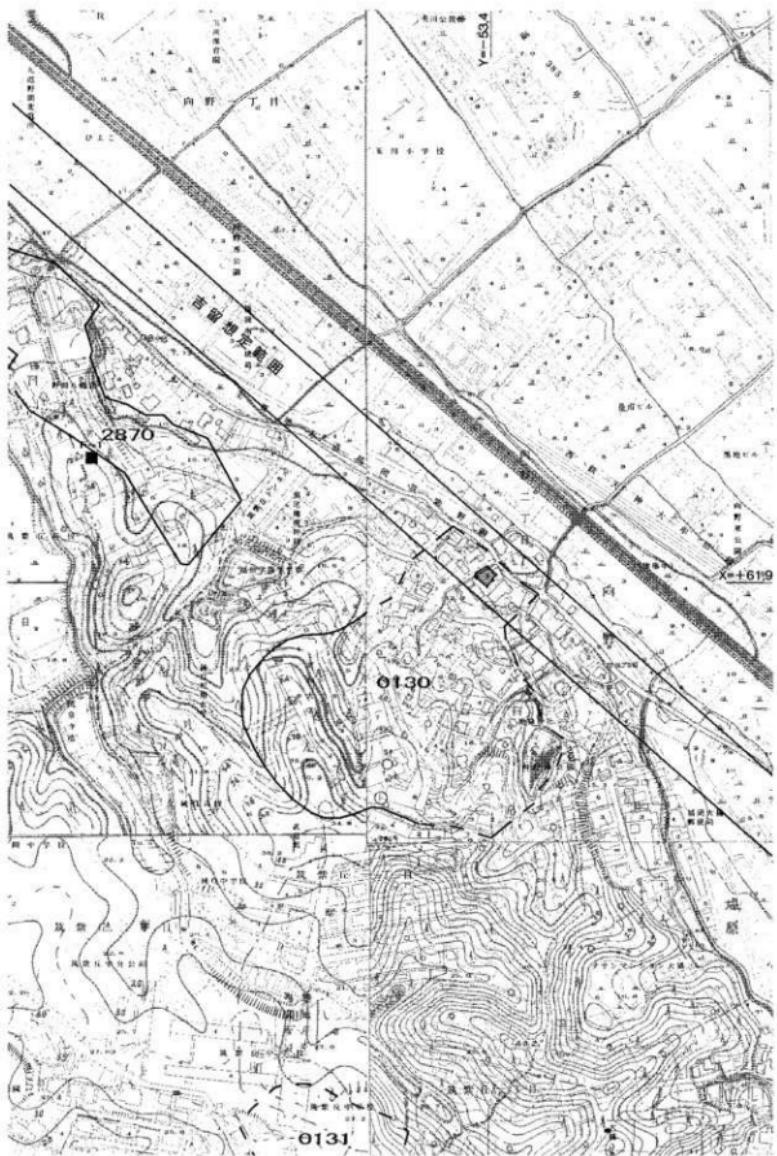


Fig.3 調査区位置と吉留推定官道 (1/4,000) ホセアミは昭和初期

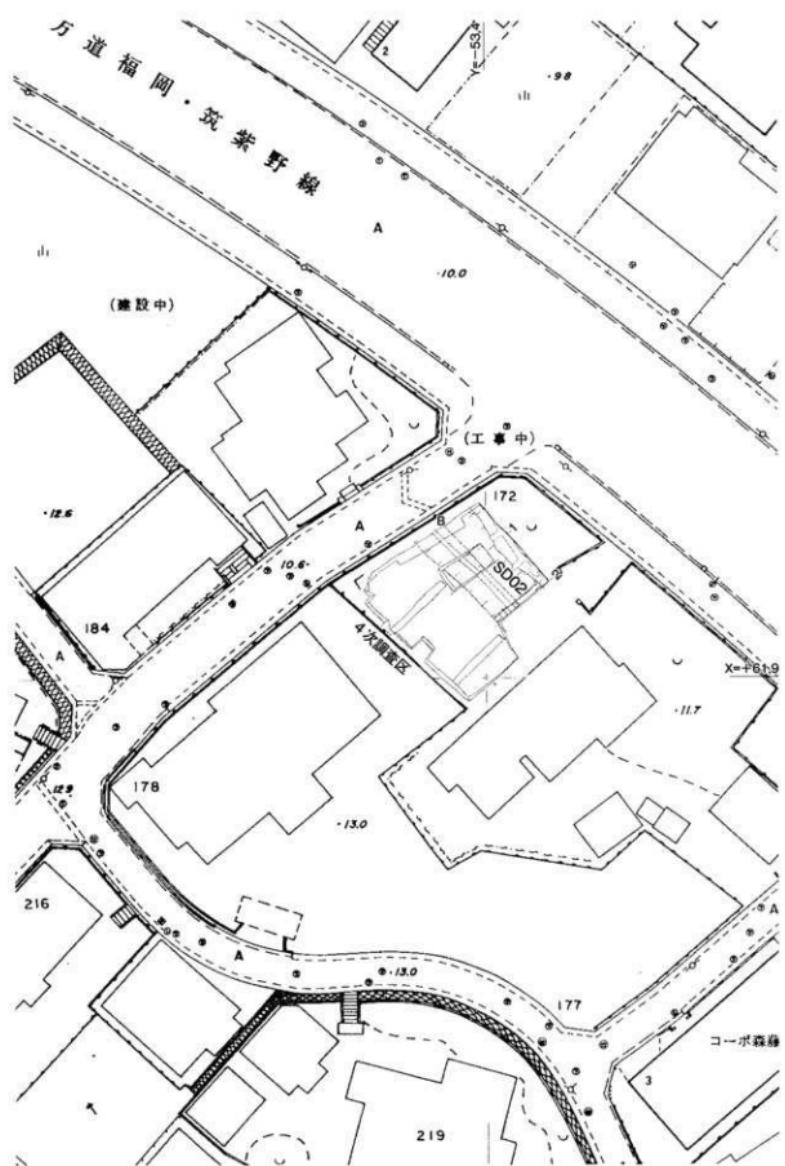


Fig.4 調査区周辺測量図 (1/500)

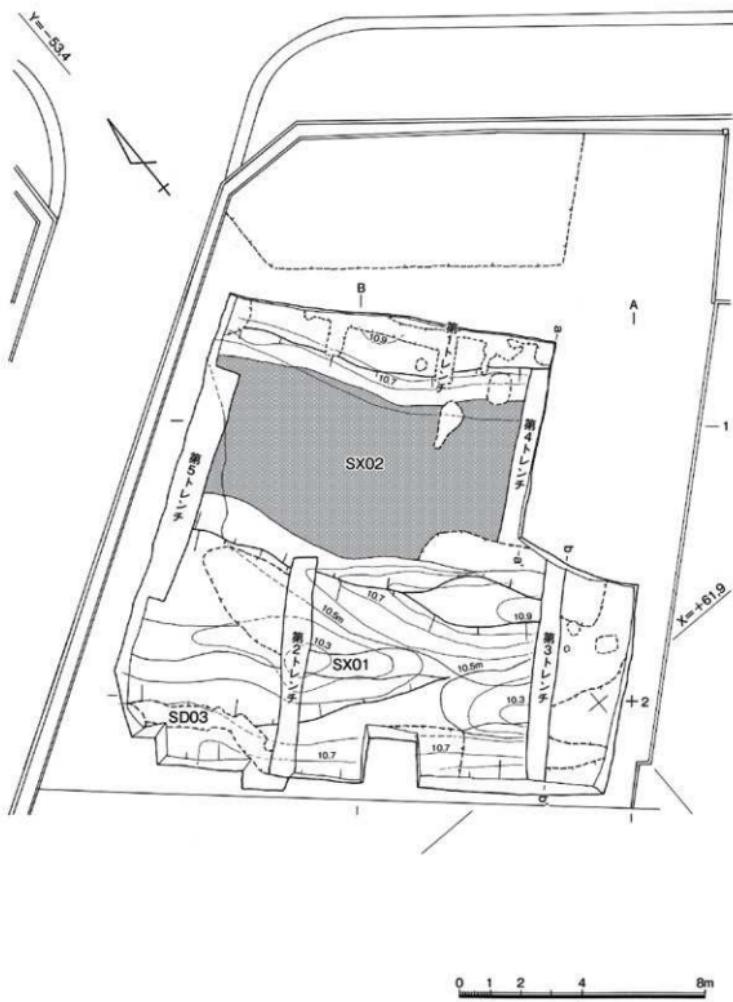


Fig.5 上面遺構全体図 (1/160)

## II. 調査区の立地と環境

本遺跡は、福岡平野を北流して博多湾に注ぐ那珂川中流域の西部、那珂川町境の片桐山（標高292m）より北東に派生した標高36～11mの丘陵先端部に立地する。海岸部から直線で約5kmの位置である（Fig.1）。前述したとおり、今回の調査区は吉留が、古地形や現況地形での道路痕跡、近年の地質調査、関連伝承地の踏査等から想定した、鴻臚館・大宰府を結ぶ水城西門ルートの古代官道上に位置している。水城東門ルートに関連する道路遺構は市域内でも那珂君体遺跡・板付遺跡・高畠遺跡・井相田C遺跡・井相田E遺跡で7世紀末～8世紀・11世紀後半～12世紀中頃の時期に確認されているが、西門ルートでは春日市先の原遺跡を最北として、水城西門以北で7遺跡、以南の5遺跡で確認されたのみで、本調査まで市域内では皆無の状態であった。

周辺は市街化が早い時期から進行したため、遺跡の破壊が進行しており、本調査以前は3次の調査が実施されたのみである（Fig.2）。全て標高20m以上の同一小支丘尾根線上で実施されている。1次調査では6世紀初頭の円墳を1基（野間1号墳）、盗掘墳と周辺から、目が1cm前後の格子目叩きと、繩目叩きの瓦片が数点検出されている。2次調査では6世紀末の円墳を1基（野間2号墳）と墳丘下から弥生中期初頭の円形堅穴住居を1軒検出、3次調査では弥生中期前半の円形堅穴住居を3軒、時期不詳の掘立柱建物1棟を検出しており、従前の調査では古代の瓦片以外は弥生時代中期集落と古墳群が検出されたのみで、野間B遺跡は殆ど消滅したと理解してきた。

本調査区はこれらの北東150m程、支丘の先端部分に立地する。現地表高で10.9～11.3mを測る。調査区南西隣地とは2m前後低い段差となって、前面の県道福岡筑紫野線（31号線）とは1m前後高い段差となっている。吉留は昭和初期の測量図を現況図に重ね、当該地が切り通しとなって古道が通過し、北側に丘陵先端部が残丘として残っていたことを確認し、ここ幅50mの中に西門ルートを想定している（Fig.3）。現道はこれを踏襲し、拡幅のためこの残丘は削平され残っていない。

周辺の古代に関連する遺跡としては、本遺跡の南東800m程に大橋E遺跡（3）があり、推定官道から南200～250mに位置し、さらに西400mに位置する三宅庵寺（4）に通ずる7世紀後半～8世紀代の幅8～10mの、両側溝と波板状遺構を伴う道路遺構が検出されている。三宅庵寺（三宅A遺跡）では7世紀末～9世紀代の東西約110m南北40m以上の区画溝と建物群・瓦溜遺構等が検出され、多くの老司式瓦の他、貿易陶磁、木簡、「造寺」「寺」「佛」「堂」等の墨書・線刻土器、硯、石帶、金属器、銅錢等が出土し、周辺では中核的な遺跡となる。

## III. 調査区の記録

### 1. 調査の概要

本調査区は遺跡、丘陵の北東先端部に位置し、前面の丘陵先端切り通しの遺存である現県道から1m前後高い宅地となっている。現地表高で10.9～11.3mを測る（Fig.4）。敷地内の、県道から南西に幅9m程は10～40cm程の表土・客土直下で明黄褐色の古第三紀層の風化岩盤・灰白シルト等の再堆積層が地山となり、標高は10.8mを測る。県道側の大部分は車庫等で深く削平されている。包含層は遺存しない。以西は幅13m以上にわたって水性堆積層が複雑に堆積し、同様に上面に客土をなして近

世以降水田・宅地と改変され、近世以降の溝・土壌等が検出される。(Fig.5)。

検出した遺構は、8世紀前半に、方位をN49°Wにとり直線的に掘削された官道の側溝である幅約6mの大溝1条(SD02)と、さらにこれ以前に幅13m以上深さ3m程の谷または流路の北東岸を整形した水路(SD01)、大溝上面を8世紀末に厚さ30cm程の地山粘土による客土で整地し、幅5m程の平坦面に改変した耕作面(SX02)、耕作面の南西に土堤で区切られた流路(SX01)である。官道路面はSD02の北東側に設置したと考えられるが、後世削平され遺存していない。

遺物は、7世紀末～8世紀末までの越州窯系青磁・灰釉陶器・須恵器・土師器・瓦・丸太材、近世～近代陶器などコンテナ2箱分検出している。

調査は遺構の破壊される建物部分に限定し、測量基準線は建物の基準線に合わせ、任意で9mグリッドを設定した。調査区が狭小であるため、南西半部(SX01部分)の調査を3月4日重機による表土剥ぎを実施、5日より作業員を導入し遺構検出を開始した。同時に、下面の遺構残存状態を確認するため試掘トレンチを再掘削(第2・3)、北東半部(第4)と北西端部(第5)の下面遺構の確認のため新たにトレンチを掘削した(Fig.5)。上面で中央北西方向にのびる土堤を境とした流路SX01を検出した。15日に全景を撮影し、17日より反転して中心と目される北東半部の上面遺構検出を開始。大溝上面客土上層で無数の凹凸を検出し、側溝を改変した二次的な道路面と判断し(SX02)、18日に凹凸の埋土を残して全景撮影。20日、21日までに凹凸を掘削。また、大雨で壁際の北西端部第5トレンチが崩落。SD02部分が深すぎ壁面が持たない状態で危険を伴うため、記録を断念してSD02部分を埋め戻し、下面遺構の確認のため壁から3m離して第1グリッド、第5トレンチ南半から1m離して第

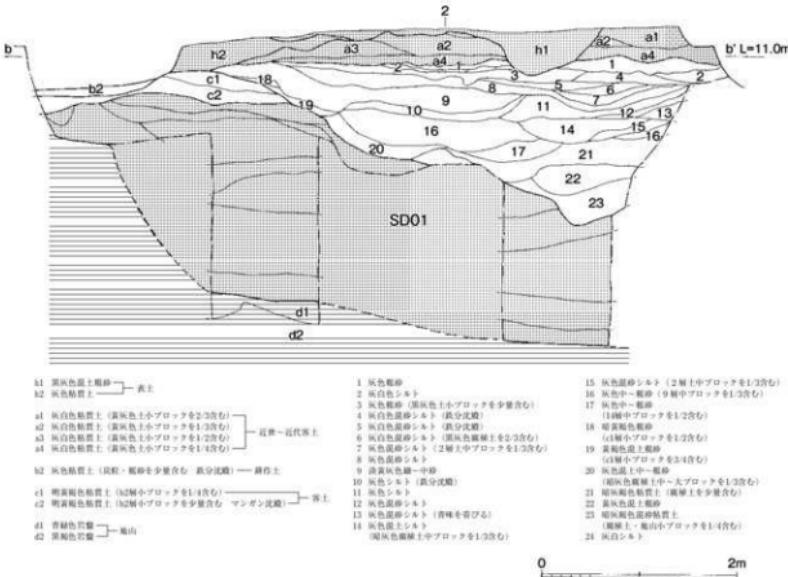


Fig.6 SX01土層断面図 (1/50)

2グリッドを設定し掘削。22日に第2グリッドで、SD01埋没後SD02掘削を確認。25日に両グリッド全景を撮影。26日実測を終了し機材を撤収、27日埋め戻して調査を完了した。この間延べ7日が雨天という異常気象のなかでの調査であった。

## 2. 上面の調査

調査は試掘第2・3トレンチで古代瓦片と地山の落ち込みが確認された遺構を検出するため、調査区南西半部から近世以降の土層掘削を開始した。同時に第3トレンチを再掘削し、土層を確認(Fig.6一点鎖線範囲)。さらに北に延長し、幅70cm高さ35cm程の土堤状の客土(c1・2層)の上面から、水成層が深さ1.7m程まで堆積しているのを確認できたため、土堤内側の流路をSX01として、土堤の検出とEL=10.5m程の土堤下端を目処に第3トレンチから北西側を調査した。また、北東半部の試掘第1トレンチで確認された地山落ち込みの遺構確認のため新たに第4・5トレンチを掘削し、幅6mの大溝上部にSX01土堤と同様の客土で厚さ25cm程整地し(Fig.7c1・2層)、上層に道路敷状の凹凸が多数確認されたため(同b2層)、官道の路面である可能性を考えSX02として、SX01の調査終了後反転して調査を実施した(Fig.5)。

### 1). SX01 (Fig.5・6・14 PL3)

調査区南西半部で検出された、土堤を境とする流路で、調査当初は官道の側溝に相当するものと考えた。しかし、南から北に土堤の下端GL=10.5mを見当として掘削したため、土堤が北に漸次低くなり北端では高さ5cmを残すのみで、北半部では客土下のSD01覆土の一部をSX01と誤認していた。第1グリッド北壁土層図(Fig.14)での検討では客土c層は西側に緩傾斜で50cmも上がっており、Fig.6の土堤際まで客土を水流で削平するSX01は北端では存在しない。北半部の途中から、北西から南東の、下面の遺構SD01・02とは逆方向に、南端部では客土下130cmまで抉る程の激しい水流となっている。Fig.6の1～23層が該当し、粗砂から粘質土まで6度以上にわたって流土が堆積している。

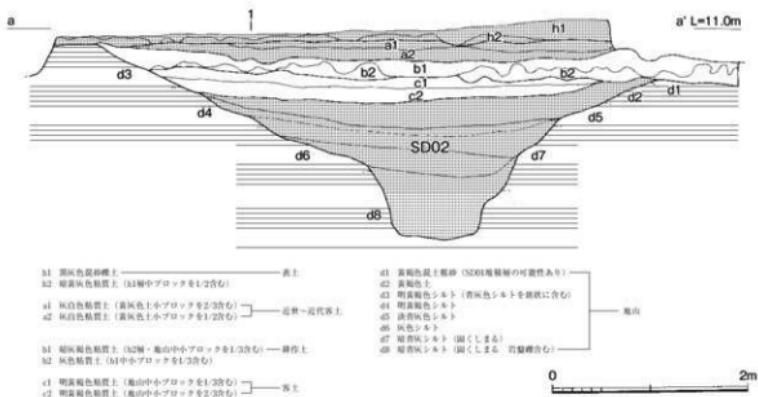


Fig.7 SX02土層断面図 (1/50)

出土遺物は試掘で検出した、海側の下端を斜めに切除した平瓦片と黒曜石の残核のみである。

## 2). SX02 (Fig.5・7・14 PL1・2)

調査区北東半部で検出された遺構で、第4・5トレンチの土層断面の検討の結果、幅約6mの大溝SD02埋没後の上部に、SX01・土堤と同様の客土で厚さ25cm程整地し (Fig.7c1・2層)、上層の灰色粘質土 (b2層) 上面で暗灰褐色粘質土 (b1層) が入り込む凹凸が多数確認された。流路SX01を側溝相当の遺構と比定し、方向・位置も吉留が想定した官道と重なるため、これが側溝再利用の二次的な官道の路面であると考え、b2層上面で、SX01の調査終了後反転してSX02として調査を実施した。

検出面は幅5.2～5.5m、高さはEL=10.52～10.57mではほぼ水平。底面から北東1.2mは大溝SD02の壁面が、南西側1m弱は土堤が法面となる。底面は無数の凹凸で覆われ、全景は凹凸の埋土を残してコントラストを強調して撮影した (PL1・2)。撮影後凹凸の全てを掘削したが、(PL2-2) 全て不定形

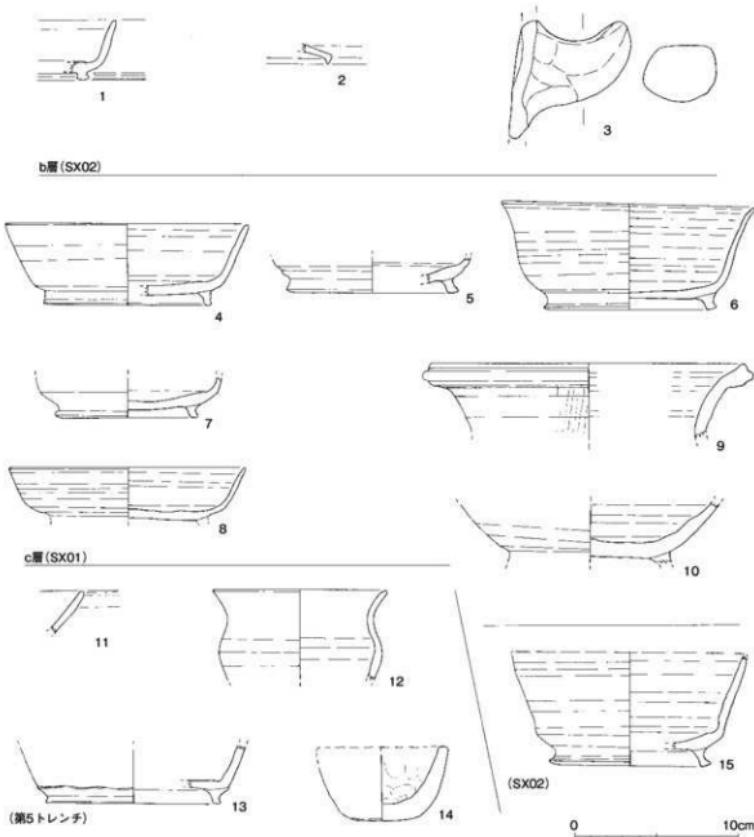


Fig.8 b・c層出土遺物実測図 (1/3)

で、明らかな人足・牛馬の蹄・轍は検出されず、長軸に沿った方向性も無く分布は乱れている。路面の突き込み痕跡の様な単位あたりの纏まりも見受けられなかった。砂や小砾を含むような硬化面もなく、軟質の土壤のままである。側溝とみなしたSX01は別個の流路であり、60cm以上周囲から下がり雨水が集約される状態で側溝をもたない路面となる。b層は耕作土の可能性があり、底面の無数の凹凸は耕作による作物の生痕とるのが矛盾が無いように思われる。

出土遺物 (Fig.8 Ph.7)

1～3はb層出土。1・2は須恵器。1は高台壺で器高3.7cm。高台脇は丸く高台は低い。内外に丁寧な回転ナデ。胎土は砂粒を少量含み灰褐色、焼成は良好。2は壺蓋。口縁内面の返しは小さく鋭い。内外に回転ナデ、外面上位に回転ケズリ。胎土は砂粒を少量含み淡灰色、焼成は良好。3は土師器瓶把手。指圧痕・ナデで形成する。胎土は砂粒をやや多く含み黄橙色。以上8世紀前半の時期を示す。

4～15は下層の客土c層からの出土。4～10はSX01下出土の須恵器。4～7は高台壺。4は復元口径14.8高台径10.2器高5.0cm。高台脇は稜を成し高台はやや長く延びる。外面に丁寧な、内面に粗い回転ナデ底面にタテユビナデ。外底は回転ヘラ切り後回転ナデ。胎土は粗い砂粒を含み暗灰色、焼成は良好。5は復元高台径10.6cm。高台脇は丸く高台はやや長く外方に張る。内外に回転ナデ。淡緑灰色で焼成はゆるい。6は復元口径15.6高台径10.5器高6.6cm。高台脇は丸く口縁は緩く外反する。高台は外方に張る。外面に丁寧な、内面に粗い回転ナデ底面にタテユビナデ。外底は回転ヘラ切り後回転

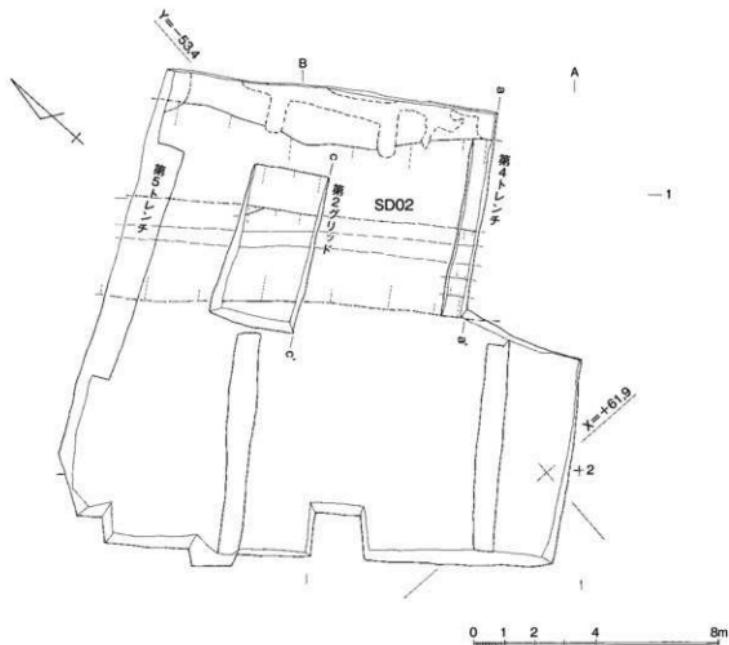


Fig.9 SD02全体図 (1/160)

ナデ。胎土は粗い砂粒を少量含み灰色、焼成はややゆるい。7は復元高台径8.8cm。高台脇は棗を成し高台は細く外方に張る。外面は回転ヘラナデ後回転ナデ、内面は回転ナデ後底面の同心円当具痕をタテにナデ消す。胎土は粗い砂粒を少量含み暗灰色、焼成は良好。8は高台皿。復元口径14.4高台径9.6cm。高台脇は棗を成し高台は接合痕を残し欠落。外面に粗い、内面に丁寧な回転ナデ底面にタテユビナデ。外底は回転ヘラ切り後回転ナデ。器壁は薄い。胎土は粗い砂粒を多く含み灰色、焼成は良好。9・10は壺。9は口縁部。復元口径19.2cm。口唇外端を丸い突帶状に成形し外面口縁下に粗いタテハケ後回転ナデ。内面は回転ナデ後「×」状のヘラ記号を施す。口唇から内面に若干灰が被る。外面暗灰色、内面淡灰色、焼成は良好。10は底部。復元高台径9.8cm。高台は強く外方に張る。外面は左回転ケズリ、内面は回転ケズリ後上位に回転ナデ。灰色で焼成は良好。

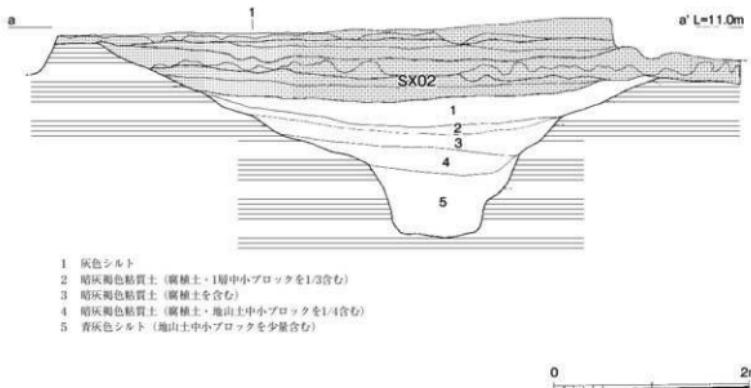


Fig.10 SD02第4トレーナー南壁土層断面図 (1/50)

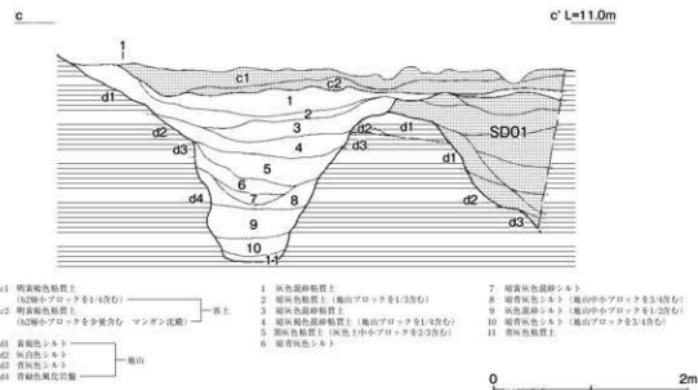


Fig.11 SD02第2グリッド南壁土層断面図 (1/50)

11～14は第5トレンチ出土。11は越州窯系青磁碗Ⅰ類の口縁小片。胎土は淡灰色で緻密、釉は淡灰オーリープで薄く透明。12は須恵器小壺。復元口径10.6cm。外面肩部下に左回転ケズリ後内外に丁寧な回転ナデ、外面頸部下にヨコケンマを施す。13は須恵器高台坏。復元高台径10.6cm。高台脇は稜を成し高台は若干外方に張る。内外面に丁寧な回転ナデ後、内底面にタテユビナデ。胎土は灰色、焼成は良好。14は土師器の鉢ミニチュア。口径8.2器高4.5cm。内面に指頭圧痕が残る。胎土は砂粒を多く含み浅黄橙色を呈する。

15はSX02下出土の須恵器高台坏。口唇部を欠くが復元口径14.4高台径10.6器高7.0cmを測る。高台脇は稜を成し高台は長く外方に張る。内外面に丁寧な右回転ナデ後、内底面にタテユビナデを施す。胎土は淡灰色を呈し焼成はやや緩い。以上、7世紀末～8世紀初を示す資料が多いが、9・10世紀代までを示す資料は8世紀末からの越州窯系青磁1点のみである。

### 3. 下面の調査

SX02の調査終了後、第4・5トレンチで確認したSX02下の大溝と、第3・5トレンチで確認したSX01下の水路状遺構の面的な検出と方向を確認するため、崩落した第5トレンチ南半から1m離し

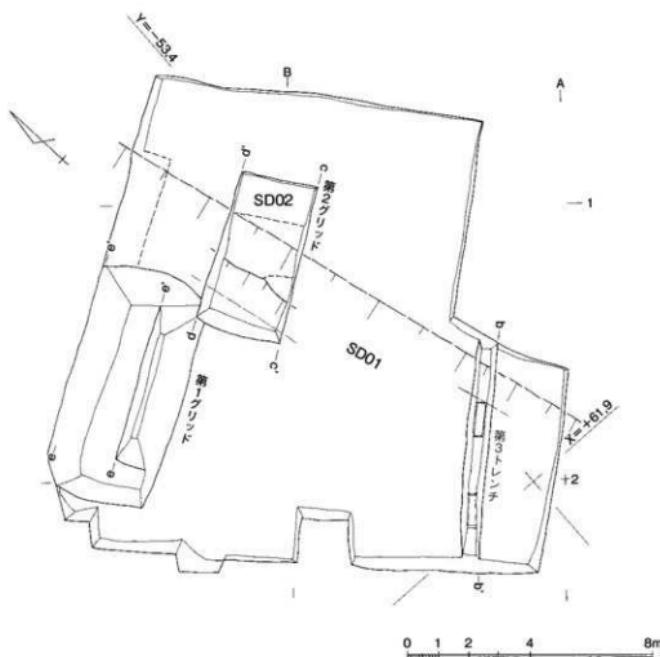


Fig.12 SD01全体図 (1/160)

て7.5×2.5mの第1グリッド、3m離して5.5×3mの第2グリッドを設定し掘削した（PL4）。

### 1). SD02 (Fig.9～11 PL5-1・2)

調査区上面北東半部のSX02下部で検出された大溝で、調査期間の関係で底面はトレンチ・グリッド

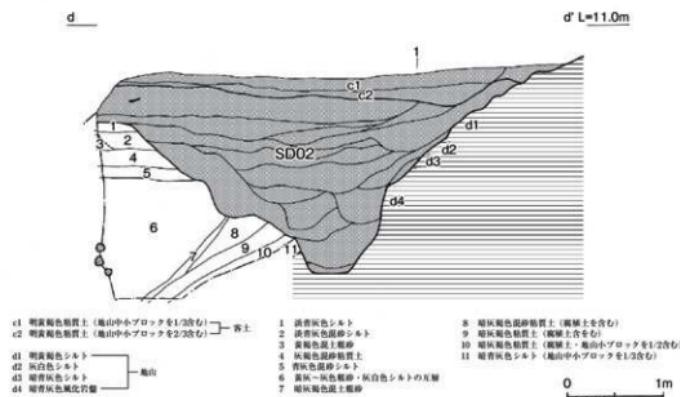


Fig.13 SD01第2グリッド北壁土層断面図 (1/50)

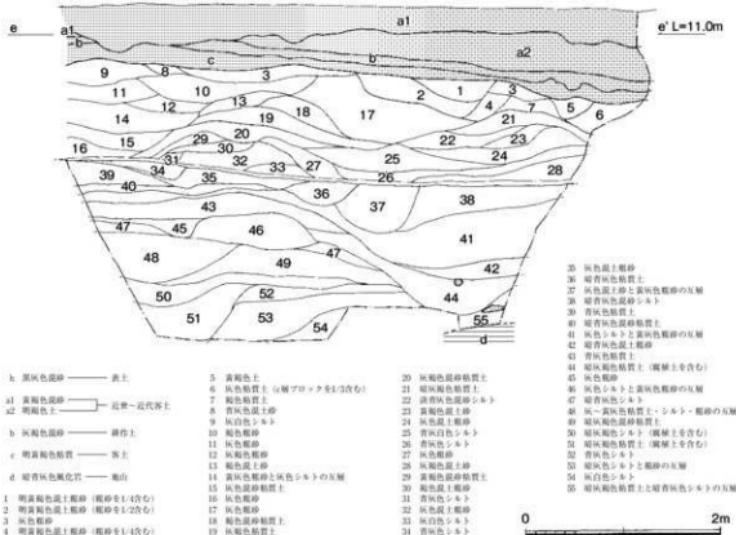


Fig.14 SD01第1グリッド北壁土層断面図 (1/50)

下での検出である。幅約6.0m深さ2.5mを測り、方位をN-49°-Wにとる。第2グリッドでSD01を切っていることが確認された。断面は幅1.7m程の中位で縦を成し幅50~80cmの底面に直線的に掘削する、幅広い「Y」字状を成す。SD01の覆土を切る北半部では水成層のため南西上端が50cm程低くなる。底面は南東から北西に下がり、埋土は粘質土～シルトで、緩やかに堆積している。

遺物は検出されていないが、上面客土のc層から多見される7世紀末～8世紀前半を示す資料の時

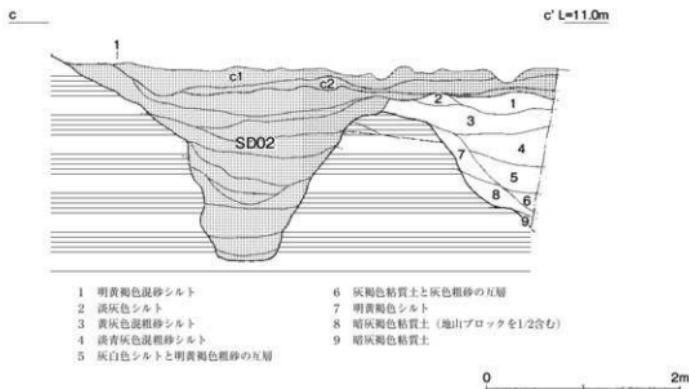


Fig.15 SD01第2グリッド南壁土層断面図 (1/50)

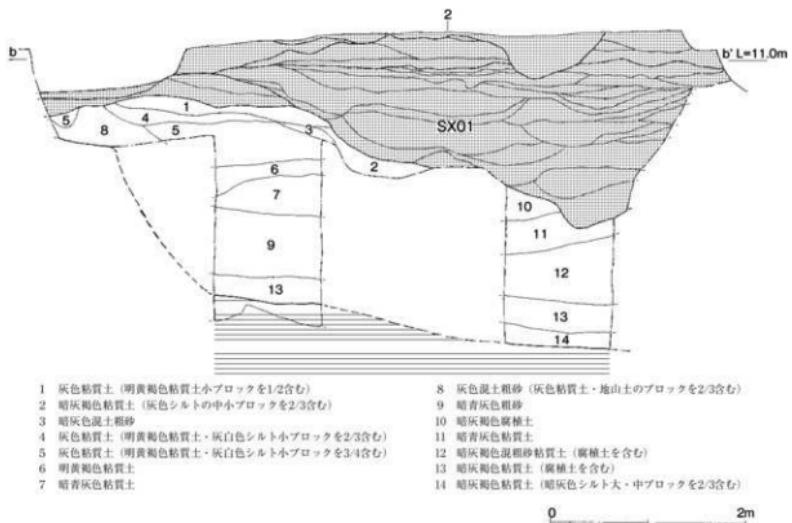


Fig.16 SD01第3トレンチ南壁土層断面図 (1/50)

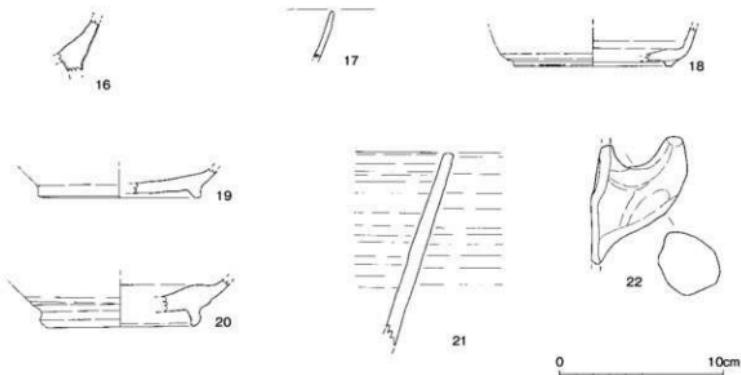


Fig.17 混入その他の出土遺物実測図 (1/3)

期までさかのぼる可能性は高い。

## 2). SD01 (Fig.12 ~ 16 PL5-3・4)

調査区上面南西半部のSX01下部で検出された大きな水路で、南西側の上場は検出されず、調査区南西隣地境の幅13m以上まで広がる可能性が高い。第1グリッドでは軟弱な埋土のため、1m離して2段に掘削しており、断面図の間に断絶がある。底面の一部と法面に平行する幅25cmの削材と径10cm弱の棒材 (Fig.14)、2グリッドでSD02に切られていること、法面に平行する径10cm前後で3本の重なった棒材 (Fig.13・15)、第3トレンチの拡張部で底面と上端を検出した (Fig.16)。各グリッド・トレンチでの上端・底面の断片的な検出であるので不明確な部分が多いが、深さ3.2m以上を測り、方位をN-15°-Wにとると考えられる。北東側の法面は45°以上の傾斜角をとっており、SD02同様、中位で稜を成す可能性がある (Fig.15)。また、法面に平行する木材も検出され人工的に手を加えられた可能性が高い。底面は南東から北西に下がり、埋土は底面に20cm前後腐植土が緩やかに堆積後、粗砂を多量に含む激しい流水で埋没している。

狭小の範囲のためか、遺物は検出されていないが、SD02に切られることから、c層の7世紀末～8世紀初頭を示す資料の時期までさかのぼる可能性がある。

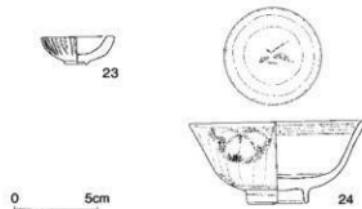


Fig.18 近世出土遺物実測図 (1/3)

## 4. その他の混入資料

Fig.17は近世造構・搅乱に混入した関連資料である。16は灰釉陶器壺の小片で、高台をもつ。外面と外底に灰白色のスリップを掛け淡灰オリーブの薄い釉を掛けるが大部分剥落する。内面上位は回転ケズリ以下に回転ナデ。胎土は精良で、内面は暗灰褐色、断面は灰～黒灰色、焼成は軟質。17・18・20・21は須恵器。17は环口縁。内外に丁

寧な回転ナデ。外面灰色、内面暗灰色、焼成は良好。18は高台坏。復元高台径9.6cm。高台は際近くにあり低い。内外面に回転ナデ後、高台脇に回転ケズリ、内底面にはタテユビナデ。灰色で焼成は良好。20は壺底部。復元高台径9cm。高台は際にありやや外方に張る。外面上位に左回転ケズリ後、内外面に回転ナデ。暗灰色で焼成は良好。21は鉢口縁部。外面上位に回転ケズリ下位にナナメケズリ後丁寧な回転ナデ、内面上位に粗い回転ナデ下位にタテ・ナナメナデ。外面灰色内面暗灰色で焼成は良好。19・22は土師器。19は高台坏。復元高台径9.6cm。高台は際にあり低い。調整は不明。外面暗灰色内面灰黄褐色で焼成は良好。22は瓶把手。指圧痕・ナデで成形する。内面にケズリを施す。胎土は砂粒をやや多く含み浅黄橙色を呈する。

## 5. 近世資料

近世遺構・搅乱内から多くの肥前系陶磁器・高取系陶器等を検出している (Fig.18)。23は肥前系白磁紅皿の完形品。口径4.5器高1.7cm。型成形で外面に貝殻状の肋線を押す。内面から口縁外下まで灰白色の透明釉を掛ける。胎土は白色。24は肥前系染付碗。復元口径10.8器高7cm。外面圓線間に藍色の呉須で3ヶ所ずつ30°ずらして上下交互に雪竔文を施し、見込みに胡蝶文を施す。全面に釉掛けし、高台骨付と、見込みを蛇の目に搔き取る。胎土は淡灰色。

## IV. 小結

検出した遺構は、8世紀前半に、方位をN-49°-Wにとり直線的に掘削された官道の側溝である幅約6mの大溝1条 (SD02) と、さらにこれ以前に幅13m以上深さ3m程の谷または流路の北東岸を整形した方位をN-15°-Wにとる水路 (SD01)、大溝上面を8世紀末に厚さ30cm程の地山粘土による客土で整地し、幅5m程の平坦面に改変した耕作面 (SX02)、耕作面の南西に土堤で画された流路 (SX01) である。官道路面はSD02の北東側に設置したと考えられるが、後世削平され遺存しないと判断される。

調査区南西半部で検出された水路SD01は、調査区南西隣地境の幅13m以上まで広がる可能性が高い。周辺では本調査以降、数カ所で試掘調査が実施されており (Fig.19)、平成21年9月の試掘 (1) では申請地北側のトレーニングで三紀層岩盤から南西に落ちGL-170cm以下までの水成堆積層の上端が検出され、SD01の延長である可能性が高い。平成22年7月実施の試掘 (2) では全面がGL-170cm以下の水成堆積層が確認され、SD01内であることを示している。平成22年11月実施の試掘 (3) では北のトレーニング南部から南のトレーニング全面に水成堆積層が谷状に検出され、標高16m附近の丘陵上まで谷地形が複雑に入り組んでいることがわかる。推定では当該地附近をN-50°-W前後で警固断層が走っており、断層による破碎帶に丘陵上方からの流水が流れ谷を開拓し、後にこの谷の肩を改削した、法面に平行する割材・棒材もあり、人為的な流路と考えられる。深さ3.2m以上を測り、方位をN-15°-Wにとる。底面は南東から北西に下がる。試掘 (1) とは直線的に繋がらず、自然地形に沿っていると考えられる。遺物は検出されていないが、SD02に切られることから、上面の客土c層の7世紀末～8世紀初頭を示す資料の時期までさかのばる可能性がある。官道を作うかは不明である。太宰府市原口遺跡で7世紀後半に埋没した道路が検出されており、別ルートで検出される可能性はある。

大溝SD02は調査区北東半部で検出され、官道の側溝と考えられ、直線的に延びる。幅約6.0m深さ2.5

mを測り、方位をN-49°-Wにとり警固断層の推定方位とほぼ同一である。断面は中位で棱を成し幅50～80cmの底面に直線的に掘削する、幅広い「Y」字状を成す。底面は南東から北西に下がる。遺物はSD01同様検出されていないが、これを切っていることから、上面客土のc層から散見される8世紀前半を示す資料の時期までさかのばる可能性は高い。水城南北で検出された幅1m弱の官道側溝とは比較にならない大きさであるが、SD01の多量の粗砂の堆積から推測すれば、丘陵上方からの激しい流土に備えるに必要な規模であったと考えられ、丘陵上はこの6m幅を通したものと考えられる。官道路面はSD02の北東側に設置したと考えられるが、後世削平され遺存しない。水城南北での調査成果から幅9～10mであったとおもわれる。

整地面SX02は大溝SD02埋没後の上部に、SX01・土堤と同様の客土で厚さ25cm程整地しこの上層上面で幅5.2～5.5m、高さはEL=10.52～10.57mではほぼ水平である。底面から北東1.2mは大溝SD02の壁面が、南西側1m弱は土堤が法面となる。底面は無数の凹凸で覆われ、全て不定形で、明らかな人足・牛馬の跡・轍は無く、長軸に沿った方向性も無く分布は乱れている。路面の突き込み痕跡の様な単位あたりの纏まりも見受けられず、硬面面もなく、軟質の土壤のままである。耕作面の可能性があり、底面の無数の凹凸は耕作による作物の生痕と考えられる。耕土からは8世紀前半、直下の整地層からは7世紀末～8世紀前半の土器を中心に、8世紀末～10世紀までの時期を示す資料は越州窯系青磁1片のみであり、8世紀末に廃絶整地転用した可能性が高い。この時期は東門ルート、水城南北の西門ルートの廃絶時期と大きく矛盾しない。

SX01は、この整地と同時にSX02の南西側に、流土避けに幅70cm高さ35cm程に盛り上げた土堤の外側に沿う自然流路で、北半部の途中、北西から南東へ、SD01・02とは逆方向に、南端部では客土下

130cmまで抉る程の激しい水流となっている。出土遺物は平瓦片と黒曜石の残核のみである。

ともあれ、今回の事案を官道ルート上と類推し、試掘調査に導き、結果、調査により官道構造検出に至らしめた吉留の判断は慧眼と言う他ない。今後は、SD01・02の延長線上で官道関連遺構が検出され、市域内でのさらなる西門ルートの解明が進むことが期待される。

#### 参照文献：

- 吉留秀義「鴻臚館から大宰府への道—水城西門ルート福岡市内探索の中間報告—」
- 「市史研究ふくおか第4号」2009
- 「高畠遺跡—第18次調査—」
- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第699集2002
- 「比恵遺跡35」
- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第821集2004
- 「三宅寺2」
- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第826集2004
- 「大橋E遺跡4」
- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第511集1997





1. 上面遺構全景（北西から）



2. 上面遺構全景（北東から）



1. SX02検出状況（北西から）



2. SX02完掘状況（北西から）



1. SX01土堤（東から）



2. SX01土堤（北西から）



1. 第1・第2グリッド（北西から）



2. 第1・第2グリッド（北東から）



2. 第2グリッドSDO2土層断面（南東から）



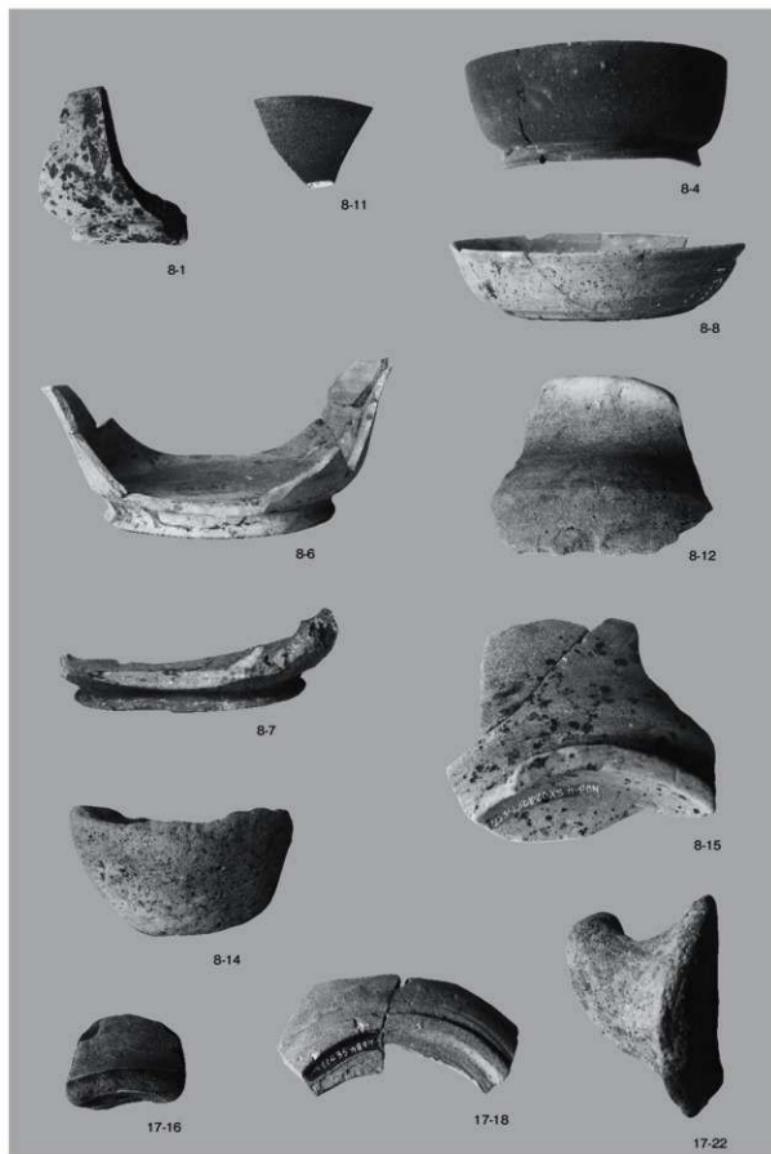
4. 第1グリッドSDO1土層断面（北から）



1. 第4トレーンチSDO2土層断面（北から）



3. 第3トレーンチSDO1土層断面（北から）



出土遗物

## 報告書抄録

ふりがな	のまびーいせき							
書名	野間B遺跡3							
副書名	野間B遺跡第4次調査報告							
巻次	3							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1264							
編著者名	加藤良彦							
発行機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	20150325							
所取遺跡名 野間B遺跡 第4次	所在地 福岡市南区 向野2丁目 172番	コード		北緯 33° 33' 37"	東経 130° 25' 21"	調査期間 20080304 20080327	調査面積 (m) 210.35	調査原因 記録保存
		市町村 40134	遺跡番号 0130					
種別	交通							
主な時代	古代							
主な遺構	官道側溝							
主な遺物	越州窯系青磁・灰釉陶器・須恵器・土師器・瓦							
特記事項	水城西門ルートの官道側溝を検出							
要約	8世紀前半に開削され、末に廃絶された、大宰府・鴻臚館を結ぶ水城西門ルートの官道を福岡市域で初めて検出した。							

## 野間B遺跡3

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1264集

2015年（平成27年3月25日）

発 行 福岡市教育委員会  
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 株式会社 西日本新聞印刷  
〒810-0041 福岡市博多区吉塚8丁目2番15号